JETの広場
The Japan Exchange and Teaching Programme

国際化への第一歩

岡山県立倉敷南高等学校外国語指導助手
Serene W. Yip
セリン・W・イップ

私は、在香港日本国総領事館で日本の文化推進の仕事をしていた時、来日してイギリスの文化交流をして、またJETプログラムに参加することによって、日本の文化を直接に学びたいと夢見ていました。

そしてJETに参加することになり、私の配置校は進学校で、生徒達の英語能力はかなり高く、他のJET参加者達に比べ、コミュニケーションをとることに問題はありませんでした。しかし、進学校で教えることは、受験ということもあり自由な教え方ができないというデメリットもありました。

進学校の第一目標は生徒を国公立大学に合格させることが中心で、私の学校も受験英語に力を入れていて、オーラルコミュニケーション（OC）の授業でも、生徒は英語でメモを取ることや書くことにかなり時間をかけていました。

これらの内容は重要だと認識していましたが、予想とは違った光景に、JETプログラムに参加したことが正しい選択かどうかが解らなくなりました。

倉敷が大好きです

何故ならOCの授業内容は、生徒の発音を直しスキット作りなどの楽しい活動をするなど、ロンドンで教えていたESL授業とあまり変わらなかったからです。しかし何よりも私は、イギリスの文化をみんなと分かち合いたいと思い、他の英会話スクールよりも、JETの「E：Exchange」の意味によって、JETプログラムを選んだからです。

語学習得は、文化的な認識が重要な要素の一つだと思い、私自身、漫画で読んでいたことに惹きつけられて、日本語を勉強し始めたからで、漫画で読んだように、女子は卒業式に本当に男子の「第二ボタン」を貰うことがあるのか知りたかったこともあります。

赴任時、受験を中心にしていた状況が、2カ月を過ぎた頃に変化があり、当時のJTE（Japanese Teacher of English）に、生徒の英語聞き取り、メモ取りとリプロダクションの練習のために、短いスピーチを書いて欲しいと言われましたが、私は、生徒が興味を持たないことを話したくなかったので、考えていたところ、あるアイディアが閃き、イギリスについて話すよいチャンスではないかと考えました。

私は、世界最大の謎の一つという、切り裂きジャックについてスピーチを仕上げ、後の数カ月の間に、スピーチを頼まれるごとに、イギリスの文化を紹介する、ゴールデンチャンスだと思う様に

なり、スコットランド版の忠犬ハチ公として知られるグレーフライアーズ・ボビー、また、生徒達に、イギリスの高校生の卒業後について、知ってもらいたいので、ギャップイヤーについてもスピーチをしました。

授業でできなかったことは、放課後にESS部（イングリッシュ・スピーキング・ソサイエティ）でしてみたりしました。当時の活動が2カ月に1回で、全部員が女子であったため、お菓子作りに興味があるだろうと思い、私は、部活の再活性化や文化理解の促進するために、ジンジャーブレッドクッキーやスコーン作りなどを企画し、また、ブリティッシュ・カウンシルを通して、イギリスでパートナー校を紹介され、その高校の生徒とメールの交換などをした結果、この活動を週2回する様になり、英語授業外では、生徒に岡山のことや、方言について教えてもらい文化交流を図りました。

学校のESS部とジンジャーブレッドクッキー作り

私が最も好きな岡山弁は「でーこんてーてーて」（標準語なら「大根炊いといて」）と「はよーしねー」（「早くしなさい」）ですが、後者を県外で使う勇気は今もありません。

このようにして、私は、岡山をもっと理解することができ、生徒にとっても英語を実践的に使う機会にもなったと思っています。

私は、よく日本について何も分からない振りをして、生徒に「助け」を求めることで、生徒に教えてもらうことで、生徒の自信をアップさせる効果もありました。あるJTEからの話で、ある生徒は、私の為に日本語を英語に通訳したことを、母親に自慢していたことを聞きました。

教師というのは生徒のロールモデルでもあると思い、生徒を英語スピーチコンテストに挑戦するように激励するために、私は自ら外国人向けの日本語スピーチコンテストに参加し、そして、そのコンテストで最優秀賞を取ることができました。

日本では、重大な仕事が任せられる前に同僚と信頼関係を築かなければならず、1年目のJET参加者は、自分の意見や提案が聞かれていないと感じる時があり、それがフラストレーションになることもありますが、頑張って自分ができる小さいことからでもすればいいと私は思っています。

挑戦する姿見せたい
高校・日本語スピーチコンテスト最優秀イップさん
生徒たち祝福うれしい
ライフスタイル ◎倉敷・岡山
スピーチコンテストで優勝したことで新聞に取り上げられました

あなたがしたどんな些細なことでも同僚と信頼を築くことになります。3年目のJETである私は、今は学校でしてみたいことを前より言えるようになり、色々な国の人々と会うことが生徒にとってためになることと思い、私は先生方の協力を得て、他のJET参加者を小型文化体験日に初めて招待し、今は、学校の第1回校内英語スピーチコンテストの企画を立てています。

「千里の道も一歩から。」

私が日本でいた時間を思い返すと、この諺が浮かびます。日本で真の国際的文化交流ができるようになるには、まだ少し時間がかかるかもしれませんが、それを早く可能にするためには、私達それぞれが自分なりにできる小さなことからでも、始められるようにして行けばよいと思っています。

イギリス出身。ロンドン大学で心理学を専攻。卒業後は在香港日本国総領事館で日本文化を推進する仕事を経て、2007年夏にJETプログラムを通して来日。ALTとして、岡山AJET会長として、充実な毎日を過ごしている。将来は日英友好を促進する仕事に就きたいと思っています。

Serene W. Yip

JETの広場
The Japan Exchange and Teaching Programme

ふるさと

玉名市教育委員会外国語指導助手
James Smyth
ジェームス・スマイス

「私は熊本県から来ました」。国内旅行で会話すると、相手は私がアメリカ出身だと思いきや、みかんや馬刺しの中心地から来たのだということを知ります。英語を教える際にはまず熊本弁で授業をします。例えば、「暑い」の代わりに「暑か」、「よし」に代わって「よかバイ」と言っています。会議で重要なことを「しないといけない」ですが、体育祭で指示どおりに動くことを「せんといかん」。うるさい熊本の子どもは「せからしか」です。自分の物は「トットット」、涼しい気候は「ススス」と呼びます。「場合」が「けん」に、「そんな」が「そがん」と言います。熊本乙女を愛している場合、「そがんバイ」と言った方が印象的でしょう。

私はいかに熊本と恋に落ちたのでしょうか？就職に際して熊本県を地図で突き止めることも漢字を書くことさえもできませんでした。でも誕生の時と同じかもしれません。生まれる場所を選ぶことはできません。私はインディアナ州に生まれ、インディアナを好きになりました。今ではどこに行ってもフージャー（注1）なはずです。それと同じように私と熊本県は深い2年間の絆で結ばれています。

天水町の風景

天子宮祭り火渡り、天水中学校２年生

私は人口が6千人の天水町に住んでいます。天水町は3年前に玉名市と合併したので、地図には載っていません。しかし人々はたいへん公共心に富んでいます。水本鶴次氏はここで熊本県では初めてのみかんを栽培しました。みかん農業が盛んになり、熊本市を除いて、熊本県では最初の電話とテレビを設置しました。天水町はさらに歴史溢れる地域でもあります。みかん栽培が最も盛んになる時期の10月15日に約千年続いている祭りを行っています。自宅の隣の天子宮（注2）において市民が大きな火をおこして、深夜まで神様に健康と豊作を祈ります。祭りに参加をする中学生は休むことなく祈願のための神楽を舞い、その中の代表の2名が火渡りをします。翌日祭りに参加した生徒たちはいつものように登校します。その祭りで、私は旗振りをして若者と一緒に宮に飛び込みました。宮の中で待ち受けている人たちは何度も私たちを押し戻しました。偶然、旗と一人の男性の頭を傷つけてしまいましたが、皆さん「ドンマイ、祭りにはつきものだよ」と許してくれました。アメリカだけでなく、東京でもこんな経験をすることは滅多にないでしょう。

中学校は1校あります。校歌の中に「日差し輝

よう（新たな）校舎に（196）若き命を培わん」。小学校は3校、玉水、小天、小天東小と呼ばれて、それぞれの学校で175名、151名、44名の児童たちが一所懸命勉強しています。天水町の隣にある伊倉小学校にいる180名の児童にも行き、英語を教えています。400年前伊倉は賑やかな港でした。加藤清正による開墾とアメリカ軍によって大きく町が変わりましたが、まだ歴史情緒溢れる地域です。

天水町は山と海の間にあります。太陽が金峰山の後ろから出て、有明海の向こうの長崎県雲仙山の後ろに沈みます。沈む様子は国旗のように赤いです。夏目漱石は熊本市から金峰山を渡って小天温泉に泊まりました。その経験を中心して「草枕」を書きました。「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい…」という一節は有名です。

私は来日して最初の3日間をホスト・マザーの水本利恵子氏の家で過ごしました。彼女が建てられた家の近くに住んでいます。水本鶴次氏の子孫は今でもみかん農業を営んでおられます。「みかん狩り」という、お客さんが自分のみかんを摘んで買って持ち帰ることもされています。農園の近くにあるバーベキューハウスで御馳走を食べることもできます。私は何回その美味しいバーベキューを食べたでしょうか。今でもよく遊びに行って、水本さんのお孫さんと遊んでいます。

水本家に限らず地域の皆さんからお世話になっています。月の食費が5千円しかかかりません。朝ごはんで食べる漬物を隣の方からもらったり、教会の友達と日曜日昼食を頂いたり、匿名でみかんが50個入っている袋を玄関に置いていただいたりしています。友情も多量。1年中話で花が咲いています。

日本は高齢化社会ですが、先輩は生活の中で私に色々アドバイスを下さいます。毎週体操や英会話、町の体育祭やプール、教会や祭りで様々な人と交流しています。来日の間、金言は「進む」でした。とにかく焦っていました。信号待ちの時でさえ待ちきれないほどでした。最近の金言は「生きる」です。たくさんの権力があったとしても、それらのバランスが取れていなければ何の成功があるでしょう？ 問題を起こす有名人や政治家に比べると、活動的なお年寄りたちの方がずっと成功していると思います。

水本オレンジガーデン・玉名国際交流バーベキュー

私がこのことから学んだことを述べます。一つ目は、食事がとても重要だということです。常に話題になることですし、楽しいパーティーにはつきものです。食事を楽しむ際に、食べ過ぎることは空腹と同じように健康に悪いことです。二つ目は、何ごとも1日に20分の練習をするとだんだん上手になるということです。三つ目は夜遅くなったら、眠ることです。昼仕事をさぼったのをカバーするように徹夜で働くことは1日を無駄にすることです。最後に、どこに行っても相手に暖かい挨拶を交わすことです。

7月から契約が終了して、台湾に中国語の勉強に行きます。しかし、絶対来日の前の性格に戻すことはできないでしょう。遠く離れても熊本県玉名市天水町にいつも私の心はあります。志を果たしていつの日にか帰らん、忘れがたきふるさと。

（注1）Hoosier：インディアナに住む人のことを呼ぶ言葉。
（注2）熊本県玉名市天水町にある神社。

アメリカ合衆国のトウモロコシが豊かでバスケが熱心なインディアナ州出身で、デューク大学で哲学およびスペイン語、中国語を勉強して、マドリードで留学しました。2008年に卒業して、JETプログラムで来日し、熊本県玉名市天水町のALTで勤務しています。9月から台北で中国語を勉強する予定です。将来の夢は夏目漱石の様な国際的な思索家です。

James Smyth

The First Step towards Internationalisation

Having worked at the Consulate of Japan where my job was to promote Japanese culture to the people of Hong Kong, I dreamt of coming to Japan to share my culture as well as to learn more about Japanese culture firsthand.

I was placed at an academic high school where students have fairly good English ability so I do not face the same communication difficulty as the other JETs. The downside of teaching at an academic high school was the restriction I had over what I wanted to teach. The primary goal of students at academic high schools is to enter into national universities. My school places a lot of emphasis on academic English and, even in oral communication (OC) classes, students would spend a lot of time writing and taking notes in English. I appreciate the importance of such lessons but because it was not a situation I anticipated, I soon began to doubt it was the right choice to come on JET. My initial understanding of OC class was that it would not be much different from the ESL classes I had taught in London. I had thought that I could help students to correct their pronunciations and do fun activities such as skit-making.

More importantly, I had wanted to share my culture: the E (exchange) in the word JET was the reason why I chose the JET Programme over all the other English teaching opportunities in Japan. Culture appreciation is one of the most important things in acquiring a language. I fondly remember how my fascination in what I read in manga led me to study Japanese. I wanted to know if Japanese girls really ask for the second button of the boys they like on graduation day.

The turning point of my situation came two months after I started my job. One day, my JTE at the time asked me to write a short speech so that students could practise listening, taking notes and reproducing passages in English. I didn't want to speak about something that students have no interest in. Then, an idea struck me: why not make this a chance to talk about my country?

I came up with a speech about Jack the Ripper, one of the world's greatest unsolved mysteries. Over the next few months, every time I was asked to produce a speech, I took it as a golden chance to share my culture. I spoke about Greyfriars Bobby, the Scottish counterpart of Hachiko, and about gap year, as I wanted the students to know what students back home do after high school graduation.

I also made up for what I couldn't do in lessons by participating in the ESS (English Speaking Society) club after school. At the time, the club activity was held only once every two months. I thought that

My Hometown

"I'm from Kumamoto." When Japanese people I meet on my travels ask me where I'm from, the land of oranges and *basashi* (raw horse meat), not America, first comes to mind. Before teaching them English, I conduct a lesson about the local dialect, *Kumamoto-ben*. Hot weather is *"atsuka,"* not *"atsui."* Our "OK!" is not *"yoshi"* but *"yokabai."* At closed-door meetings, a must-do is *"shinakereba naranai,"* but outdoors at Sports Day practice, it's *"sen to ikan."* Noisy Kumamoto children are *"sekarashika."* One's personal things are *"to-to-to;"* cool weather is *"su-su-su."* To indicate a hypothetical situation, we use *"ken"* instead of *"ba-ai,"* and "that kind of thing" is *"sogan"* rather than *"sonna."* If you love a Kumamoto girl, the best way to tell her that is *"Sogan bai."*

How did I fall in love with Kumamoto? When I applied for JET, I couldn't even write its name or find it on a map. But then, I didn't choose the place where I was born, either. I grew up in Indiana, and then I loved it. Wherever I go now, I go as a Hoosier[(1)]. Kumamoto and I have such a bond now, one forged day after day for two years.

I live in Tensui-machi, a town of six thousand people. Tensui was incorporated into Tamana City three years ago, so you won't find it on a political map now, but it's as proud as ever. Tsuruji Mizumoto grew Kumamoto's first oranges, commonly called *mikan*, here. His business was so lucrative that excluding Kumamoto City, Tensui was the first place in this prefecture to have telephones and television. Yet Tensui is much older than that. The Tenshigu Shrine next to my house has conducted a festival on October 15, the peak of the orange season, for almost a thousand years. The townspeople make a bonfire, celebrate, and pray through the night for health, protection from disasters, and a plentiful harvest. Some junior high school students dress in priestly vestments and tirelessly perform *kagura*, sacred music and dance. Two of them run through the scalding ashes of the fire pit three times to finish the ceremony. The next day, everyone goes to school and work as usual. At this year's festival, I was a flag-bearer for the young people. We charged toward the temple and crashed into its elderly defenders, only to be fended off, for hours. I accidentally cut an older man with the flagpole, but I was immediately forgiven; everyone said, "Don't worry, that's what happens during festivals!" Could I have had such an experience in America, or even in Tokyo?

Tensui Junior High School, as its song proclaims, cultivates [196] young lives in a brilliant new school building that shines in the sunlight. The town's three elementary schools, Tamamizu, Oama, and Oama Higashi, have 175, 151, and 44 students, respectively, and they are hardworking. I also teach English at neighboring Ikura Elementary School, which has 180 students. Four hundred years ago, Ikura was a bustling port city. Kato Kiyomasa's land reclamation policy eliminated the port, and during World War II, the United States Air Force eliminated the bustle, but it's still a proud and historical neighborhood.

Tensui is nestled between the mountains and the sea. The sun rises from behind Mt. Kinpo, the northern border of Kumamoto City, and sets behind Mt. Unzen, a volcano across the Ariake Bay in Shimabara, Nagasaki Prefecture. The setting sun is as red as the one painted on the Japanese flag. A hundred years ago, Natsume Soseki hiked across Mt. Kinpo and stayed in our town's Oama Onsen. He wrote the novel

Serene W. Yip

the club members, being only girls, would be interested in cooking and so, to re-activate the club and to foster interests in foreign cultures, I planned cooking activities such as making gingerbread cookies and scones. Through the British council, I was able to find a partner school in the UK to which the students wrote pen pal letters. Activities are now held twice a week.

Outside of the classroom, I would ask the students to teach me about Okayama and its dialect. My two favourite *okayama-ben* are *"dekon-te-te-te"* (in standard Japanese, *daikon taitoite*: stew the radish) and *"hayo shine"* (*hayaku shinasai*: Do it quickly!), the latter of which I am too afraid to use outside of the prefecture. This not only helps me to understand Okayama more but also provides a practical means for students to use their English. Another 'trick' I use to get students talking is asking for 'help' from students by pretending not to understand anything about Japan. This is a real confidence booster for them. Once I heard from my JTE how one of the kids boasted to his mother how he had translated Japanese into English for me. Being a teacher also means being a role model. In order to motivate my students to participate in English speech contests, I entered myself into a Japanese speech contest for foreigners, of which I was awarded first place.

In Japan, a trusting working relationship needs to be built before one is given more responsibilities. Some JETs might feel that in their first year their ideas and suggestions are not unheeded and this can lead to frustration, but hang in there and do what you can! You don't need to do anything big.

The little things you do will build trust in your colleagues. Now that I am in third year, I have more voice over what I would like to try out at school. Feeling that my students can benefit from meeting people of different cultures, with the help of teachers, I invited JETs to visit our school for a mini cultural experience day. This was something that had never been done before. At the moment, I am trying to put together our first in-school English speech contest.

A journey of a thousand miles begins with a single step.

I am often reminded of this proverb when I look back on my time in Japan. Japan might still have some way to go before becoming an internationalised society, but to bring about this change quickly, we can all each start by doing something small, in our own ways.

英語

James Smyth

Kusamakura (Pillow of Grass) about this experience. "Going up a mountain track, I fell to thinking. Approach everything rationally, and you become harsh. Pole along in the stream of emotions, and you will be swept away by the current. Give free rein to your desires, and you become uncomfortably confined. It is not a very agreeable place to live, this world of ours[(2)]," says the narrator in the famous opening lines, so he goes to the countryside to refresh his muse.

After coming to Japan, I spent three days at the home of my host mother, Rieko Mizumoto. I live near her in a house that she built, and every week I go to her home and play with her grandchildren. Tsuruji Mizumoto's family runs a successful orange business even now. They offer an activity called "Mikan Hunting," in which you can pick your own oranges from the fields, buy them, and take them home. The garden also has a large barbecue house. How many times have I enjoyed that delicious food, I wonder?

The rest of the town takes care of me, too. I spend only five thousand yen a month on groceries because I so often receive food from neighbors, eat meals with them, or have lunch at my church. A bag of fifty oranges was once left on my doorstep anonymously. I bring them souvenirs from my travels and pictures of my home and family. My friendships abound, and I have warm conversations all year long.

Japanese society may be aging, but I've learned a lot from the lifestyles of my many elders. I talk to them every week at exercise time, English conversation salons, the pool, and my church. When I first came to Japan, my motto was *susumu*, or advancement. I hurried everywhere I went, and I was even impatient for stoplights to turn green. Now, my motto is *ikiru*, or living. Even if you work hard, if your life is out of balance, what will come of it? Who is more successful, I wonder: celebrities and politicians troubled by scandals or the active senior citizens that I've met here?

Here are some things I've learned from them. First, food is important. It's an easy conversation topic, and it can make a great party all by itself. Yet as important as it is to enjoy food, eating too much is as bad for your health as eating too little. Second, if you do anything for even twenty minutes a day, you'll become good at it. Third, when it's late, go to bed. If you try to make up for a lazy afternoon by staying up all night, you'll ruin the following day. Finally, wherever you go, you are among human beings, so greet them warmly.

My contract finishes in July, and then I'll go to Taiwan to study Mandarin, but I'll never be the same person I was before I came here. No matter how far I'm separated from Tensui, it will reside in my heart. As it is written in the folk song *"Furusato,"* "Some day, when I have done what I set out to do, I will return…My hometown is unforgettable."

(1) People from Indiana are called "Hoosiers."
(2) From Alan Turney's translation, The Three-Cornered World.

英語